

グスタフ・クリムトによるウィーン大学講堂天井画「医学」について —— 関連する人物素描に見られるマイブリッジの連続写真の受容を中心に

前田 朋美 (名古屋大学)

ウィーン分離派 (Wiener Secession) の中心人物であるグスタフ・クリムト (1862-1918) は、「哲学」、「医学」、「法学」各学科の栄光と発展を主題にしたウィーン大学講堂天井画 (「学科絵 Fakultätenbilder」) を制作した (1897-1907 年、第二次世界大戦中に焼失)。先行研究では、学科絵の描写をめぐる依頼主との争訟、ショーペンハウアーやニーチェの哲学を核とする作品解釈、一部モチーフの図像解釈や図像源泉の特定といった問題が取り上げられてきた。本発表では、E. マイブリッジの連続写真と天井画の制作過程、特に「医学」の素描との関係を考察する。この写真については、2003 年に T. マーロウ=ストルコヴィチ (Tina Marlowe-Storkovich) が「医学」の図像源泉の 1 つとして指摘するが、格闘する人物のポーズなど、写真と完成作の類似性を漠然と提示するに留まる。

これに対して発表者は、約 780 点の連続写真と、「医学」に関連して制作された約 200 点の人物素描、各段階の準備スケッチ (これらの素描やスケッチの大部分は 1898-1901 年に制作されたと考えられる)、そして完成作とを精密に比較した結果、人物のポーズを転写、素描の表現に大幅な質の変化をもたらすなど、写真の影響が素描に色濃く現れ、完成作ではそれを消化した形で適用していることを明らかにする。

本発表では、「医学」と関連する素描における連続写真の直接的影響を示す証左として、被写体のポーズをそのまま転写したと考えられる人物素描 6 点を新たに指摘する。さらに間接的な影響として、「医学」以前の素描には見られない表現上の特質である以下の 4 点を提示する。①激しい動作から日常的な身ぶりに至るまで、多様性を極める人物像のポーズ、②身体表面に見られるコントラストの強い明暗表現、③上下左右から多彩な角度で人物像を捉える視点、④同一の用紙に運動、時間性、視点の移動を伴う複数の素描を並置すること。

このような連続写真の影響は、「医学」に先立って制作された「哲学」に関わる素描や完成作にも僅かながら認められるのに対し、「医学」の直後に制作された「ベートーベン・フリーズ」(1902 年) と「法学」(1903 年) の素描に見いだすことは困難である。したがって、連続写真は、「医学」に関与していた極めて限定された期間 (1900 年前後) にクリムトに影響を及ぼしたと考えられる。「医学」の準備スケッチおよび完成作では、不統一で多様な視点から捉えられた多数の人物群が絵画空間に充満するが、このような表現が出現した背景には、素描を媒介に連続写真を受容した過程が存在する。この観点から、「医学」の完成段階における特徴的表現を生んだ契機の 1 つとして連続写真を位置づけ、さらに当時の画家の関心の所在や制作を取りまく状況を照らし出すことも可能となる。